

手賀沼通信(第334号)

Eメール : nittay@jcom.home.ne.jp
<http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai>

<http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/> 新田良昭
<http://tegatu2.web.fc2.com>

あけましておめでとうございます 今年もよろしくお願ひいたします

新年号は大学の後輩北村尚巳さんから頂いたエッセイです。

私は坂本龍馬のファンですが、読んでみて新しい発見がありました。

特別寄稿

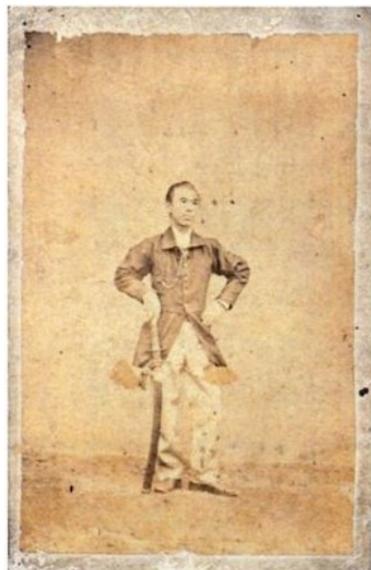
龍馬に劣らぬ先進性 赤松小三郎 北村 尚巳

幕末に活躍した土佐藩の郷士、坂本龍馬は1867年11月に「新政府綱領八策」をまとめ、議会政治や人材登用など新しい日本の構想を提言した。藩の枠にとらわれず、薩長同盟の仲介などで行動力をを見せ、時代を先取りする視野の広さが今日の龍馬人気の基になっている。

その龍馬に先立ち、議会開設や人民平等を唱えた人物がいた。上田藩士の赤松小三郎。だが龍馬と比べ、その知名度は著しく低い。(信州・歴史探訪。毎日新聞 2018年1月18日)

1. 赤松小三郎とはどんな人物

信州上田藩の下級武士出身。江戸に出、内田弥太郎、下曾根金三郎に師事し、数学、天文、測量、暦学、蘭学、砲術を習得。その後、勝海舟の供侍として長崎の海軍伝習所で英学、兵学、航海術を学んだ。さらに横浜の英國士官アプリンから英語、英國兵法などを習う。



幕末の京都に私塾を開き、東郷平八郎、上村彦之丞などに洋式兵学を教えた。島津藩島津久光侯の委嘱により「重訂 英国歩兵練法*」を翻訳した。

*「英國歩兵練法」という初の本格的な陸軍の歩兵操典を英語から翻訳刊行し、英國の近代的な兵術を教授した兵学書。「キヲツケ」「マエヘスマスメ」などの号令を広めた。

将来の政体構想と国家のグランドデザインを描き、慶應3年(1867)5月、前政事総裁職・前福井藩主松平春嶽侯と島津久光侯とに「建白七策」を建言した。天幕一和、諸藩一和のもと上下二局の議政局により、内憂外患の時期を乗り切る方策を模索し、東奔西走した。

明治維新の直前の慶應3年9月に薩摩藩士によって京都において暗殺された。

2. 赤松小三郎の経歴

天保2年(1831年)上田藩*下級武士芦田勘兵の次男として生まれた。幼名は清次郎。幼少の頃から算数の勉強が好きであった。

*上田は真田昌幸が築いた城下町である。真田家は1622年に松代に移封され、代わって小諸から仙石氏が入り、さらに1706年に但馬の出石から仙石氏と入れ替えで徳川譜代の松平氏が上田城主となつた。赤松小三郎が仕えた当時の上田城主は、松平伊賀守忠優(のち忠固と改名)であった。松平忠優は、日米和親条約と日米修好通商条約という二度の条約調印時にいずれも老中を務め、政権の中枢を担つた人物。

18歳の時に、藩の許しを得て江戸に上り、幕臣の内田弥太郎の門人となり算数、天文、測量、暦学、地理、蘭学を5年程学び、師匠内田の紹介で

幕臣下曾根金三郎に蘭学、砲術を学んだ。

安政元年（1854年）上田へ帰り、同藩士赤松弘の養子となる。

再び江戸に上り、幕臣勝麟太郎（後の海舟）の門人となった。翌年秋、勝に従い幕府が開設した長崎海軍伝習所へ行き蘭学、英学、兵学、航海術を学ぶ。その傍ら蘭語の本を訳し『新銃放射論』『選馬説』の稿本にした。更に、蘭語の本を『矢ころのかね小銃穀率*』と訳し刊行した。

長崎在学中に咸臨丸や觀光丸に乗船して対馬や薩摩へも航海し、航海技術の向上にも努めたが、安政6年（1859年）長崎海軍伝習所の閉鎖により、勝に従い江戸に帰航した。

*穀率：弓のしづり具合。標準。

万延元年（1860年）咸臨丸が米国に向けて品川を出航するが、清次郎は乗船の夢が叶えられず上田で傷心の生活を送った。

文久元年（1861年）心機一転、小三郎と改名し、藩務に専念した。（自分より若い旗本の赤松大三郎（則良、後に海軍大将）が航海士として乗船できたので赤松小三郎と改名した）

文久3年（1863年）松代藩士白川久左衛門近克の娘たかを娶り、それが縁で4月蟄居を解かれた佐久間象山と初めて松代で会談した。（後述）

小三郎は象山と初対面後3年目に京都に出て家塾（私塾）を開く。

開塾と同時に、薩摩、肥後、大垣藩が入塾させ、越前藩は4人の藩士を送った。島津久光はその授業を知つてから、京の薩摩藩邸に教室を提供して出兵してきた藩士の教練をさせた。生徒には中村半次郎、村田新八、東郷平八郎らで、門弟800人。生真面目で頑なまでに「天幕一和」「幕薩一和」を推し進めることができが欧米列強から日本を守ることだと奔走。

親交のあった会津藩の山本覚馬と一緒に「幕薩一和」を目指して、薩摩の西郷隆盛、幕府側へは慶喜のブレーンだった若年寄永井尚志らに働きかけを行った。

その最中に、討幕派の薩摩藩士中村半次郎（桐野利秋）らによって慶応3年（1867年）9月京都ひがしのとういんどうおり東洞院通魚棚にて暗殺された。（後述6. 暗殺の真相）

翌年1月薩長討幕軍の挑発に乗った幕府軍は、京都鳥羽、伏見の戦いに応戦し、一年余に及ぶ戊辰戦争が始まった。戦火を交えず大政奉還によって平和裏に、また欧米大国の干渉を受けず日本の近代化を進めようとした佐久間象山、赤松小三郎、さらには坂本龍馬らの深謀遠慮は碎け散った。逸早く東帰し、天皇への恭順に徹した将軍徳川慶喜の一途さが朝廷の御容許となり、欧米大国に付け入る隙を与えたことは何よりであった。（出典：伊東邦夫、赤松小三郎顕彰会会長）

3. 建白書はどんなものか

慶応2年（36歳）8月幕府に対し政体改革を建白。同年12月幕府は赤松を開成所教授に登用しようとしたが、主家（上田松平家）の承諾が得られず実現しなかった。その頃までに、家塾では薩摩などをはじめ入門者が相次ぎ800人に及んだ。慶応3年（37歳）5月越前の松平春嶽、薩摩の島津久光に、上下両院の議院構想を含む七ヶ条の政体構想を建言。

建白書の中身は、選挙で選出された議員による議会政治を提案するもので、維新前には加藤弘之が立憲君主制案を考え、大久保忠寛が諸侯による議会の案を出していたが、普通選挙による議会制民主主義案は赤松が最初だという。（関良基「赤松小三郎ともう一つの明治維新」）

これまで赤松小三郎の「建白七策」は、越前の松平春嶽の政治活動を記録した「続再夢紀事*」に載っていたことで歴史学者はこれを史料として扱ってきたのだが、薩摩藩の島津久光宛ての「建白七策」が、「鹿児島歴史センター・黎明館」にあることを赤松小三郎研究会が見つけた。また、2015年8月に青山忠正・佛教大教授の講演会をした際に、客席にいた作家・桐野作人氏が「盛岡藩が幕府宛ての『建白七策』の写しを保管している」と発言。これによって、3通目の別個の「建白七策」が発見された。（赤松小三郎研究会）

*「続再夢紀事」の慶応3（1867）年5月17日に「御改正之一二端奉申上候口上書」が掲載されており、これが通称「建白七策」と呼ばれる文書。（週刊朝日『坂本龍馬より時代に先駆けた赤松小三郎暗殺の真相』宮原安春）

福沢諭吉の『西洋事情』は前年（慶応2年）10月に刊行され、20万部超の当時の大ベストセラーで、アメリカ連邦政府と大統領制、上下両院制などが紹介されている。赤松の遺品目録の中に同書もあり、赤松も同署を読んでいたに違いない。そういう意味では赤松の「建白七策」の内容は、当時政治の最先端であった京都において知識人の間では常識であったと言える。

春嶽や久光が赤松の建白書を最初に見たときは「やっぱりこのような建白書が出てきたか」という感想だったかもしれない。ただ、赤松の「建白七策」ほどこの次期に他に先駆けて日本の近代化に向けて具体的に描いたものは他にない。また、すぐ後の坂本龍馬による「船中八策」や「新政府綱領八策」のモデルになったと思われる。（青山忠正佛教大学教授の講演）

坂本龍馬の「船中八策」は実在せず

従来、薩土盟約「約定書」の原案は坂本龍馬の「船中八策」と考えられてきた。龍馬が「船中八策」を後藤象二郎に伝え、後藤がその案で山内容堂を説得して藩論としてまとめたのだとされてきた。龍馬の「船中八策」はあまりにも有名であるが、実在が確認されない文書である。

青山教授の講演会で、赤松小三郎研究会会長丸山瑛一會長が「坂本龍馬がその1ヵ月後に書いた『船中八策』では赤松が議事政局と書いた用語が使われている。赤松の建白書を模倣したものではないか」という質問が出た。それを受けて知野文哉氏がこう解説した。氏は龍馬伝説の伝説部分をそぎ落として史料に基づいた『「坂本龍馬」の誕生』を書いた著者だ。

「坂本龍馬が船のなかで書いたと言われる『船中八策』は明治以降の創作です。維新後に薩長閥から政治的に冷遇された土佐出身の政治家が功績を強調するために龍馬の活動を誇張して膨らませたのでしょう」（週刊朝日『坂本龍馬より時代に先駆けた赤松小三郎暗殺の真相』）

4. 赤松小三郎と佐久間象山の会談

文久3年（1863年）松代で二人は会談し、歳の差を越えて両者の共通の関心事である馬の話、銃砲、艦船、政治体制の話にまで及び、相当に腹を割って話したものと思われる。藩士が佳境に入る

と専門的な部分は蘭語を交えた話であったことが、後に交わされる象山からの書簡から読みとれること。

初対面の会談でありながら「今の日本の状態では清国のように先進欧米大国に屈し植民地化されるだろう。一日も早く日本を近代化に導くことだ。それには京都に出て家塾を開き志士や草莽（在野）の臣を啓蒙することだ。一日も早く大志を持って京都へ出よう」と肝胆相照らし金打（きんぢょう）（固い約束）を打ったことと思う。

その後、象山は元治元年（1864年）3月17日松代を立ち京都に入り、約4か月後に反対派の河上彦斎らによって暗殺される。

5. 山本覚馬と同志の赤松小三郎（丸山瑛一赤松小三郎研究会会長）

NHK 大河ドラマ『八重の桜』に登場した八重の兄山本覚馬。会津藩が京都守護職を務めていた時、覚馬は藩主松平容保に付いて京都に赴任し、洋学所を開いた。赤松小三郎は既に衣棚で英式兵法の塾を開き、門弟800人と言われる盛況であったが、覚馬に注目されて親しくなり会津洋学所の教授を頼まれたが、赤松は薩摩藩の依頼で「薩摩塾」を開いていたためこれを断り、洋学所の顧問に就任した。因みにこの時一緒に顧問になったのは、英学者の西周だった。

会津藩は鳥羽伏見の戦いに敗れ、覚馬は眼疾が悪化して両眼失明し、薩摩藩に捕えられて二本松の薩摩屋敷に幽閉される。この時口述でしたためて、慶応4年6月に薩摩藩に提出した「管見」は覚馬が渾身を籠めた23ヶ条の建白書で、小松帶刀、西郷隆盛、大久保利通らを驚嘆させた。戊辰戦争後中央政府に入った大久保利通は、内務卿に就任して絶大な権力を握り、富国強兵・殖産振興などの政策を実施したが、その多くが山本覚馬の建白書に基づくものと推察される。

覚馬の管見は、赤松小三郎が松平春嶽、島津久光に提出した7項目の口上書が下敷きになっていると見て間違いない。

「幕薩一和」赤松小三郎と山本覚馬の二人は、日本の将来が欧米列強の餌食にならないために幕府と西南雄藩との和睦が必須であるとの見解で一致していた。赤松が兄柔太郎に宛てた慶応3年8月17日の手紙には、薩摩藩の西郷吉之助と自分が

談合し、幕府方には会津の公用人が当たっていると書かれている。

しかし、その前年、坂本龍馬の仲介で薩長秘密同盟が成立し、幕府と会津は一夜にして「朝敵」の汚名を着せられることになる。赤松は9月3日に刺殺されて、二人の大きな夢は消えてしまった。

6. 暗殺の真相

京都の赤松に上田からの再三の召喚命令（藩の兵制改革に必要と断って帰藩を急がせた）で、赤松はやむを得ず帰国を決意するが、帰国直前の慶応3年9月3日午後4時頃東洞院通を北上中に路上で2人の男に斬られる。一人は間違いなく薩摩の桐野利秋（人斬り半次郎と呼ばれた中村半次郎）。1967年に発見された桐野の『在京日記』のなかに、桐野ともう一人で赤松を殺したと書いてあった。

薩摩にとって、軍事・政治の機密保持のためか。また、赤松の「幕薩一和」の考えは、当時討幕に傾いていた薩摩にとっては邪魔だったのだろう。

（明治維新私学会・青山忠正佛教大学教授）

「中村に命令できたのは西郷隆盛だから、西郷が政治・軍事の機密保持のために殺させたのだろう。西郷は明治維新の実力者だから、赤松を殺した犯人は誰も口を拭って言わなかった」と青山教授（前出）は言う。

好戦的な西郷には平和主義の赤松は邪魔だったのかもしれない。

赤松の死後1ヶ月後に戊辰戦争が始まった。

暗殺後、埋葬されたのは京都金戒光明寺でそこに墓がある。それは京都守護職・松平容保の本陣が置かれていた寺。ここには鳥羽伏見の戦いで会津藩士たちの眠る墓地がある。

赤松小三郎の死を悼んで島津久光は300両を贈り弔意を示した。その3カ月後には京の金戒光明寺に墓を建て、薩摩受業門生の名前で墓碑に彼の業績を記した。

その墓石に赤松小三郎への讃辞を刻んで世間に体裁を整え、先生には不幸にも「遭緑林之害而死」と刻んだ。「緑林之害」とは盜賊、強盗のことであり、赤松小三郎は強盗に遭って死んだことにした。

7. 東郷平八郎らの逸話

日露戦争を勝利に導いた連合艦隊司令官だった

東郷平八郎らは「薩摩が今日あるのも、日露戦争に勝てたのも赤松先生のおかげ」と述べたと言われる。

東郷平八郎、伊東祐亭、上村彦之丞の三将軍は、日露戦争に勝利した翌年の1906年5月、信州の善光寺で行われた戦没者慰靈祭に出席。その帰路5月10日に上田を訪問し、赤松家の消息を尋ね、小三郎の遺族に対し弔問金を支払ったと言われる。またその折に、千曲川の築漁場で遊んだ際に乗った舟が大屋神社に飾られている。



大屋神社に飾られた舟と掲額

上田城二の丸に赤松小三郎顕彰碑（贈従五位赤松小三郎君之碑）がある。その碑には「元帥伯爵東郷平八郎書」と書かれている。

赤松小三郎研究会ホームページ（上田高等学校関東同窓会）

https://uedakant.sakura.ne.jp/akamatsu_kenkuy_kai/index.html

